記念誌 「相中相高八十年」 ”思い出の記 ” より

## 学 徒 動 員

中 46 回卒　小 山　　隆 (※1)

相中第四五回、四六回生が学徒動員で横須賀の海軍航空技術廠支廠に出動したのは戦雲急を告げていた昭和十九年十月である。その時すでに四年生は川崎に、五年生は福島に動員されていた。昭和十七年相中入学以来、配属教官に大和男子と生まれたからには陛下のため、皇国のため死するのが男子の本懐であるとの教育で鍛えられていた。花なら蕾の若桜。十五、六歳の我々は五尺の生命をひっさげて、むしろこれが非常時における学徒の本分であると喜び勇んで壮行の途についたのである。今思うと死と隣り合わせの生活に何の疑問や不安を持たない軍国日本の少年だった。

横須賀での寮生活は磯子、釜利谷の白山寮から始まる。ここは二十四寮が建ち並ぶ山間の寮で、一般工員、台湾から動員されてきていた少年（我々学徒は台湾工と呼んでいた）など合同の宿舎である。相中生の工場での職場は火光部、射撃部、製鋼部等であったが、私は二十名の同僚と製鋼部の鍛錬工場に配属された。その頃この工場では特攻隊用の爆弾の素材を作っていた。簡単に言えば巨大な鉄の棒を溶鉱炉で焼きプレスで切断する仕事であった。最初は二人組で鉄棒に鏨（たがね）をあてがう仕事を受けもたされたが、真赤に焼けた鉄棒を前にしての仕事、その暑さは大変なものであった。

……　中略　……

鍛錬工場は汗をかき真黒になるので、風呂に入り帰ることができるが、他に配属された同級生は週に一回か二回の寮での入浴、それも時間制限でのイモ洗い、シャツの縫い目には虱（しらみ）がべったり。夜は南京虫に悩まされ、現在の若い人達には到底想像できない寮生活だった。また食糧にもこと欠き、誰かに田舎から小荷物がきたとなると、夜中にこっそり炒り豆、餅などを失敬するなど、今でも同級会での笑い話である。工場や寮で台湾工とのトラブルもしばしばあった。このためか二十年春頃だと思うが、現在の京浜富岡に学徒だけの宿舎が建てられ我々もそこに移動したのである。汚い話であるが白山寮は便所など汚物があふれ足の踏み場にも困る程であったが、そこは清潔な寮だった。しかしこの寮に移ったがため、後で同級生二人が爆撃により命を落とすことになるとは、神ならぬ身の知るよしもなかった。

……　中略　…

そしてあの八月十五日を迎えたのである。この日誰言うとなく、今日昼間に重大な放送があると伝わり、そのとおり我々は製鋼部の中庭に集められた。破れた作業衣、相中の学帽に神風とそめ込んだ手拭いで鉢巻をし「忍び難きを忍び」のあの玉音放送を聞いたのである。今想い起しても、私はそのとき日本が負けた、無条件降伏したとは信じられず、ただ茫然としていたように覚えている。日本は負けるはずがないと教え込まれたごく普通の日本人の一人であり、純真な少年だった。ただ負けたんだなと本当に感じたのは、それからの第三国人の暴動、同級生の佐藤君などが袋だたきに遭い、ラジオが阿南陸軍大臣の自決を報じ、横須賀地区の少壮血気の青年士官が寮にきて、学校は我々と行動をともにせよ、本土決戦をやるんだと各寮を廻るのを見てからであった。

引揚げのとき引率の先生はほんとうに苦労したと思う。我々は身一つで、八月十九日逗子駅より本線廻りで、ダイヤの混乱により宇都宮駅では数時間も待たされ、その上列車も石炭、牛、馬などを運ぶ貨車、暑いので扉を開け振り落されないよう綱を張り、次の日の夕方おそく中村駅に着いたのである。

こうして学校に戻ったのであるが、動員に出動した我々同級生は、教育指導する上で支障があったとは思いたくないが、四年で卒業してもよし、もう一年残り勉強してもよしとの臨時措置がとられたのである。このようなことで、入学がおなじでも私の同級生は第四十五回、第四十六回卒業と二回にわたっているのである。

……　後略　…

（※1）昭和 22（1947）年卒　中村出身

（選択＆転記　村山）